

一般助成 子どもの健やかな成長を願う事業(やすらぎ・いたわり)

「依存症者の家庭で育つ子ども向けプログラム」事業

精神的、経済的負担を強いられる依存症者のいる家庭の子どもや母親を仲間としてケアすることに取り組む

アルコールや薬物、ギャンブルなど様々な依存症があるが、依存症への病理的理解が決して十分とは言えない状況の下で、依存症者を抱えた家族にかかる負担は相当なものがある。社会的なセーフティネットとして、その家族を支援する態勢が未整備の中で、体験者自らが中心となって支援やケアに取り組んでいる。



依存問題を抱える親子向けキャンプを告知するチラシ



ギャンブル依存症に関する講演会を開催

依存症者を家族に持つ家庭の親や子どもを支える態勢がほとんどない日本の状況

依存症者と生活をともにした経験を持つ家族や支援者など約20名が中心となって、2014年に横浜市で設立された「日本のお母さんに花束をプロジェクト」。ドキュメンタリー映画の上映会や子育て中の母親向けの講演会などを行ってきたが、現在は団体の拠点を代表の清水菜美さんが移住した沖縄に置いている。

現在は回復しているが、清水さんの夫は一時、ギャンブル依存症を抱えていた。そのために別居もし、保健師としての仕事と子育てに追われながらの生活を余儀なくされたが、家族の絆を取り戻した現在、その経験をベースに日本で子育てに悩む母親を元気にしたいとの願いを込めて団体名をつけた。「どのような状況に置かれようと、子育ては苦しいだけのものではない。お母さんが笑っているこ

とで周囲が変わっていくし、それが子どもへの最高のメッセージになることを伝えたい」と、清水さんは話す。

依存症は特に日本において社会的な偏見が強く、本人や家族も恥の意識から問題を明るみに出すことも拒むケースが多い。また子どもがいると、子どもへの影響を気にして相談を躊躇する傾向も強い。依存症者を家族に持つ家庭では、その影響で精神的にも、経済的にも負担の多い生活とならざるを得ないが、自助グループなどの回復のための組織の認知も十分とは言えず、また家族や子どもへの支援網も、ほぼ手つかずといった状況にある。そうした中で、「日本のお母さんに花束をプロジェクト」では依存症者のいる家庭の母親や子どもたちをサポートする活動を続けているが、2017年度はAJOSCの助成を受け、2つの事業に取り組んだ。

親子ツアーで感情を解放する機会を提供し講演会でギャンブル依存問題について学ぶ

その一つが、依存症問題を抱える親子を対象として8月10～12日に沖縄・南城市で実施した「親子 de 無人島体験ツアー」キャンプである。沖縄と神奈川から計30名(大人13名、子ども17名)が参加し、自助グループが使用するテキストの読み合わせとその感想の分かち合い、無人島での自然体験などを行った。

「子どもらしい体験の機会を提供すること、また親も問題から一時離れ、普段は蓋をして感じないようにしている自身の感情を解放することでリラックスする時間を提供することを目的に実施しましたが、仲間として三日間一緒に過ごすことで、距離が縮まっていくのを感じました。参加者の親からは、子どもが普段我慢して言えないことも発散できたようで、最後にはわがまままで言うようになったという感

想も寄せられました」と、清水さんと事務局の高尾美穂さん。

もう一つが、2018年3月4日に沖縄大学の教室で4時間にわたって開かれた講演会「治る?!ギャンブル依存症～家族と子どもに伝えたいメッセージ～」である。これは依存症の本人、家族、医療関係者、回復支援者、子どもの支援に関わる人々を対象にしたもので、会場には50名以上が参加した。

1部では当事者の語りとして、家族、本人、子どもの立場から3人の発表があり、2部では依存症問題に取り組む精神科医の伊波真理雄さんと、「NPO法人ギャンブル依存ファミリーセンター ホープビル」代表の町田政明さんによる講演と質疑応答があった。会場探しやチラシの配布などで苦労したというが、手作り感と希望が感じられる印象に残る講演会だった。



沖縄大学で開かれた講演会

助成団体: 日本のお母さんに花束をプロジェクト



依存症者を抱えた家族や子どもの支援を継続していきます

当初の助成申請プログラムから変更がありましたが、その趣旨を汲んでくださり、内容を変更しての実行を認めてくださったこと、また、実績も少なく、専門性の低い未熟な団体であるにもかかわらず、助成をいただけたことに心から感謝しております。自分たちの思いを実現でき、支援者のネットワーク作りにも役立ちました。子ども食堂など、次の活動につなげていきたいと思っています。

日本のお母さんに花束をプロジェクト
代表 清水菜美さん